

スポーツをする場としての  
少年団の関わり方

泉 課題解決のためのキーワードがいくつかあると思っ  
ています。まずは、「子どものスポーツ

との出会いの場としての少年団、  
幼児の受入とアクティブ・チャイ  
ルドプログラム(以下ACPR)に  
ついて。少子高齢化の影響で団  
員数が減少していますが、団数  
の減少率も高い。また、昨年12月

にスポーツ庁が行った調査では、  
子どもの体力が急落という結果  
が出ました。その背景に授業以  
外の運動時間の減少、スマホなど  
の使用時間の増加、小中学生男  
女の肥満増加などが指摘されて

いますが、子どもたちとスポーツ  
との関わり合いが希薄になりつ  
つあるのではないかと。この点を非常  
に心配しています。

富田 少年団の子どもたちの体  
力は、実は30年前とほぼ変わって  
いないんですね。体力が低下して  
いるのは運動していない子ども  
で、そういう子どもが増えている  
。まさにスポーツとの出会いが  
なくなっているのだということ  
です。それと団員数減少  
を含めて考えると、スポーツをす  
る場として少年団が選ばれなく  
なっているのではないのでしょうか。  
運動が苦手だったり、やりたいけ  
ど近くで活動している団のやり  
方では無理だと思っている子ど  
もたちに、少年団全体として  
もっと門戸を広げていくことが  
大事だと思っています。

米谷正造  
(指導育成部会長)

村田久忠  
(広報普及部会長)

森島堅二  
(副本部長)

泉正文  
(本部長)

萩原美樹子  
(副本部長)

富田寿人  
(活動開発部会長)

【特別企画①】  
緊急  
座談会  
スポーツ少年団の役割、  
これからの時代において  
求められる活動について考える

子どもの体力低下、スポーツ離れといったジュニアスポーツ全体の課題があるなか、スポーツ少年団(以下少年団)も加入率の低下、活動の過度な競技志向化といった課題がある。こうした課題解決のために、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会(2021年に開催延期)を契機に、少年団はその役割と求められる活動を再確認し、リスタート。少年団の歴史・理念を生かしつつ、現状と課題を踏まえ、これからの取り組みについて考える。

※日本スポーツ少年団副本部長の大西真知子氏は都合により欠席

写真 藤原裕治

森島 団員数の減少は保護者が少年団をどう捉えているか、ということも関係していると思  
います。現状では、子どもたちの  
送り迎えなど保護者の負担が  
かなり大きいので、やらせたくて  
もなかなか入れられないという  
声を聞きます。育成母集団がど  
う取り組んでいるかが絡んでく  
るので難しい問題ですね。例え  
ば、民間の水泳教室ではバスで家  
の近くまで迎えに来てくれて、  
子どもの面倒をちゃんと見てく  
れる体制になっているところもあ  
ります。

村田 幼児の受入については指  
導者の確保が困難なことも挙  
げられます。少年団は3歳から  
考えていく必要があると思いま  
す。

富田 少年団では競技別の全  
国交流大会を開催しています  
が、今年度からバレーボールの大  
会が全国1位を決めるのではな  
く、ブロックごとに1位を決める、  
つまり優勝チームが複数あると  
いう形式に変わりました(\*)。こ  
れは一つのあり方だと思えます。  
全国の1位を決める大会を少年  
団でやるべきか、今後は真剣に議  
論しなければならぬかもしれ  
ません。一方で、試合に出たいとい  
う子どももいます。複数の団で  
協同しながらさまざまなチャン  
スを子どもに与えられるようにな  
らねばいけません。そのなかで  
多岐にわたる世代になって  
いくと、まさにクラブ化への一歩と  
なるのではないのでしょうか。

\*新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止

団登録が可能になりました。運  
動遊びで楽しく体を動かし、好  
きになつてもらうことが大切で  
すが、実際、指導者が1〜2人  
で活動している単位団で安全に

指導するのは容易ではないです  
よね。  
萩原 私は民間業者と提携し  
てやっている保育園のプログラム  
にバスケットボールのコーチとし

て指導していますが、バスケット  
ボールを見聞きしたことがある  
子ども、やったことがない子ども  
さんいるので、まずは低いリング  
を設定するなど、ボール遊びと

全国1位を決める  
大会は必要ない!?

村田 その一方で、課題  
として競技志向があ  
ります。サッカーの場  
合、以前は全国大会の  
出場条件に少年団登  
録が義務づけられてい  
ましたが、現在はその  
義務が外れ、登録して  
いない団がとても多い。  
こうしたことも絡めて

スポーツ少年団の理念

一人でも多くの青少年に  
スポーツの喜びを提供する

スポーツを通して青少年の  
こころとからだを育てる

スポーツで人々をつなぎ、  
地域づくりに貢献する



いずみ まさふみ  
泉 正文  
日本スポーツ少年団本部長

萩原 私もそう思います。登録人数を増やそうと思えば、先ほどのサッカーの例で出場条件に団登録を義務づけてもらえば伸びるでしょう。けれど、少年団の理念を考えるとそれは少し違うと思います。私もさまざまな地域でバスケットボールを教えていると、クラブチームや部活動でやるのは怖いという子どもの声はけっこう聞きます。もともと違う形でやりたいという子がどれくらいいるのかわかりませんが、やはり子どもたちにとって選択肢があるといいなと思います。

村田 そうですね、選ばれたいです。全国1位を決める大会は競技団体が開催して、少年団では優勝チームが複数になるやり方も考えられると思います。森島 かつての文部省が、小学校は対外試合禁止という通達を出していました。その抜け道というか、試合を行う一つの手段として少年団が用いられてきた

の子どもたちがサッカーをやりたいから河川敷に芝を張ろうとしました。それが発端で、その学校の小学生が全員参加して芝を張ったり、保護者や指導者らも「子どもたちがやるなら手伝おう」となったんです。少年団が発信して動く、地域の人たちも「子どもたちのために何かやってやろう」といい連鎖が生まれる。これが、まさに「スポーツで人々をつなぎ、地域づくり」に貢献する」ということですね。

萩原 昨年行われたラグビーW杯でも、同じようなことがありました。いろいろな地域で出場チームが試合前にキャンプしていたとき、地域の人たちがその国のことばや国歌を覚えようと取り組んでいて、私は「できるじゃない」と思ったんです。とてもいいことですね。地域で応援するために、スポーツ一つが大きなきっかけになるのを感じました。

泉 さまざまなイベントに絡んだりしません。米谷 私は地元で教育委員をしていましたが、市区町村レベルでは学校と地域スポーツとのつながりがほとんど見られませんでした。今回を機に少年団の指導者の方が、部活動の応援隊として



むらた ひさただ  
村田 久忠  
日本スポーツ少年団広報普及部会長

こともあつたと思うんです。でも、全国大会については競技団体に任せてもいい時代ではないでしょうか。子どもの指導について、競技団体と少年団がめざすところの棲み分けをそろそろ考えたいときなのではないかと思

ていくときなのではないかと思

### 指導者が担う役割が非常に重要

泉 2018年に当協会が発表した「日本スポーツ協会がめざすべき『新たな地域スポーツ体制』の在り方」では、最終的に部活動も取り込んで、総合型地域スポーツクラブ（以下総合型クラブ）と少年団との融合を目標にしています。これを今すぐやるのは現実的に無理ですが、それぞれの実情を重んじながら徐々にやっていくのがいいのではないかと。



もりしま けんじ  
森島 堅二  
日本スポーツ少年団副本部長

米谷 そのためには指導者が担う役割が大事になります。20年4月に少年団指導者制度が改定されスタートを切ったばかりですが、それこそ少年団の理念をよく理解した方が指導者となる、そして指導者同士が手を組んでいける。今回の制度改定は、そうしたことにもつながっていると感じています。

富田 例えば、小学生にはこういう指導が必要だとときちんと指導できるのが大事です。ね。さらに、幼児にはこうやって遊ぶと楽しいよということ伝えていかなければならない。これを全部1人ではできないので、得意分野を持った指導者が複数名いて、子どもたちそれぞれの目的に合わせて指導できるというのがいいですね。

米谷 地域スポーツクラブのなかに少年団があったり、幼児を受け持つような子育て世代の保護者も一緒に参加できたりするといいです。ね。すでにそうした活動をやっているところもあると思います。

富田 ACPの講習会でよく言っているのは、「運動遊びからスポーツ学校や行政に積極的に働きかけていただきたい。そうすることが少年団への理解の向上と中学生の少年団活動への参加につながるはず。」

萩原 これまで話してきたことはもちろん簡単にできることではないと思いますが、それでも私は理想を語りたい。スポーツは本来、楽しいものです。それを1人でも多くの子どもが享受してほしいです。われわれ大人はそのために何ができるのかを考え続けていく必要があるとあらためて思いました。



よねくら しよじろう  
米谷 正造  
日本スポーツ少年団指導育成部会長

持って地域の子どもたちへの指導に当たることが大切なのではないか。私も今後はこの方向性でやっていきたいと思いました。

村田 ドイツのスポーツクラブを訪ねたときに、年齢構成を聞く「ゆりかごから墓場まで」と言われたんです。いずれは地域スポーツクラブのあり方として少年団と総合型クラブ、学校の部活動を融合し、新しいスポーツクラブを創造する。やはりここをめざすべきだと思います。ここへ向けて、各競技団体やスポーツ庁も含めてお互いに向かっているかなければならないかなと感じています。

米谷 少年団は、地域に向けて今以上に積極的に情報発信と地域活動へ参加をして、理解してもらうこと。そうすれば地域づくりも含めて、地域の方々が支援協力してくれるのではないかと思います。



はぎわら みきこ  
萩原 美樹子  
日本スポーツ少年団副本部長

ではないでしょうか。あそこに行けば何か楽しい、誰かに会える、自分の居場所がある。そういう場がスポーツであれば最高だと思えます。

米谷 部活動に入っていない子や辞めてしまった子は行き場がないですからね。

富田 やはり地域のなかで子どもたちを育てていく必要があります。また、子どもたちが「する」スポーツを、親や地域の人たちが「みる」「あるいは「ささえる」といったことがあると、まさに地域ぐるみのスポーツを通じた子どもたちの育成につながります。少年団はそういう場でもあつてほしいですね。

村田 そうですね、今はオリピック・ムーブメントとして、地域を清掃するボランティア活動を行っている団も多いです。そうした地域に認められる活動を忘れないでやってほしいですね。

米谷 その一つの事例で、少年団す。もう一つは、小中高生が集える場になってほしい。地域におけるクラブハウスのなものだと思つて、少年団以外の子どもも集まってくれば少年団にも関心を持つてくれると思います。

森島 今言われたような地域の組織が出来上がると、学校の先生方の負担も減るのではないのでしょうか。これまで学校で担っていたことを地域が担えるようになれば、Win-Winの関係になれると思います。



とみた ひさと  
富田 寿人  
日本スポーツ少年団活動開発部会長